

録音の忠実性とオーセンティシティの関係性についての考察

—— コミュニケーション論及び音楽記号学のモデルを参照して

中村 将武 (東京大学)

その音響が「高忠実 (ハイ・ファイ)」であることは録音再生機器の音響や録音された音楽を評価する規範の1つとして作用してきた。他方、「オーセンティシティ (真正性)」の概念は、西洋クラシック音楽に関して歴史的に「正しい」演奏を示す規範として作用してきた。忠実性が再生産される音響と生の演奏の接近に、オーセンティシティが演奏と作者の意図の間の接近に価値を見出す点で両者の間には形式的な類似が指摘でき、忠実性をオーセンティシティと呼称する研究も存在する。しかし、録音の忠実性とオーセンティシティの議論が対象を異にするためか、両者の関係が明確に示されてきたとはいえない。本発表では両概念の関係を示すことを目的として、コミュニケーション論と音楽記号学におけるモデルを参照した議論を試みる。これによって忠実性の外延を示すとともに、オーセンティシティにおける録音の位置づけを明らかにすることが期待できる。

はじめに忠実性とオーセンティシティがそれぞれ多様な概念であることについて、両者の分類を通して整理を行う。まず忠実性について発表者が以前行った議論を参照し、録音再生される音響が生演奏に対して高忠実であることに加えて、作曲あるいは録音に対して高忠実であることでも評価されることについて論じる。さらに Peter Kivy の議論を参照し、西洋クラシック音楽におけるオーセンティシティに4つの種類が混在していることを概観する。これらの分類から、個人的オーセンティシティと演奏に対する高忠実、意図としてのオーセンティシティと作曲に対する高忠実性という種類の間にそれぞれ類似があることを指摘する。

忠実性とオーセンティシティの分類から、両者の類似の重層性が示唆されるが、個々の忠実性、オーセンティシティの関係は必ずしも明らかではない。そこで本発表では、議論の導線としてコミュニケーション論などにおける音楽制作・受容のモデルを参照する。はじめに、シャノンとウィーバーのコミュニケーション・モデルとその限界を論じ、次に種々の忠実性とオーセンティシティが単独のコミュニケーション過程としては記述できないことについて、音楽的コミュニケーションの領域において提起された多段階の流れモデルを参照する。それによって、連続するコミュニケーション過程における複数の忠実性、オーセンティシティの対象の位置づけを示し、忠実性とオーセンティシティのいくつかの種類が、特定の主体のメッセージが正しく聴衆に伝達され、コミュニケーションが成功する点で類似することを示す。次に、ジャン=ジャック・ナティエによる音楽記号学のモデルを参照することによって、多段階の流れモデルでは説明できない、オーセンティシティにおける歴史的な対象の位置づけを示すとともに、忠実性とオーセンティシティが異なる対象に関する解釈の比較によって生じる点では区別されることを明らかにする。